

《生産者紹介》

【すみだ農園】

- 〒286-0118千葉県成田市本三里塚 171-61
- 代表者 住田学

自分で企画し自分で作ったものを…と考える

脱サラし研修を経て就農、4年で営農を軌道に乗せた住田学さんの挑戦は、“さわやか”を地で行くようです——。40歳で脱サラ、現在46歳。家族は奥さんと9歳・6歳の男の子が2人。脱サラのときすでに家庭もちだったのですが、住田さんはそのときの決断から今に至る有機農業の取り組みを熱く歯切れ良く語りました。

転職を考えたのは平成22年のこと。大学卒業後に就職したのは、精密機械のセンサーを作る国内有数のメーカー（外国にも系列会社多数をもつ東証一部上場）で、営業マンをしていました。誇りをもって仕事をし結果も出していました。しかし朝6時から深夜までの勤務もしばしばで、疑問もありました。そんなとき社内でちょっとした問題が起きて、転勤の話も重なり、「脱サラ」が頭をもたげました。

会社が大量生産した製品を売り、売上の数字を伸ばすことが仕事の目的となっていたことの反動からか「自分で企画して自分が作ったものを、消費者にそれと知って買ってもらう仕事がしたい」と思いました。

そして大いに悩みました。脱サラに奥さんは将来を心配して反対、実家・広島で薬局を営む両親も反対でした。でも、脱サラ後の人生に対する強い決意を話し、理解を得る努力をしつつ「自営」の仕事は何にするか、休日を利用して新しい仕事探しに奔走しました。

民宿経営などが浮かんで消える中、生産者と消費者の直接的繋がりを実現できると考えた漁業（漁師）と農業が最終候補となりました。趣味のサーフィンを休日に楽しめることも、人生に幅をもたせるため外せない条件でした。

農業や漁業フェアを各地に訪ね、アドバイザーの意見を聞き、熟考の末、農業を選びました。「海に近い場所なら農業をしながらサーフィンも楽しめる」と判断したのです。「農業の“の”の字も知らなかったのに」と言いますが、そんなことなど何の問題でもなかったことを証明していくこととなります。確かな人生設計と強い決意が転職後の新しい歩みを支えたのです。

成田空港近くの有機農業の研修施設に入る

平成22年9月。退社。翌23年4月に農業フェアで知った、千葉県山武郡芝山町にある有機農業の研修を行う「有限会社グリーンポート・アグリ」（以下“グリーン”と略記）に研修生として入りました。“グリーン”は「成田国際空港」（株式会社）の滑走路周辺の「騒音対策地域」と呼ばれる農業以外には利用できない「農地」を活用しようという研修施設です。無料で2年間、有機農業を学べる場となっていて、20歳から55歳までの就農希望者を受け入れています。宿泊施設はなく、住田さんは近くにアパートを借り、通って研修生活をする事になりました。

畑と水田で有機農業を展開する“グリーン”には、有機農業を目指す男女10数人が入所していました。住田さんは農業を選んだときから「絶対、有機農業」と決めていて、子育て中だったこともあり「食べ物はできるだけ安全なものを」と奥さんとも意見が一致していました。

会社を辞めたあと半年後に研修が始まり、野菜に的を絞って学びました。畑の耕耘の仕方や畝の作り方、施肥の仕方、さらに種蒔きや苗植えなどを、プロの指導者に順を追って教わり、自ら行い、1つ1つ技術を習得していきました。教室での講義もあり、有機農業とは何かを様々な角度から学んだのです。

約2年間の研修期間はあっという間に過ぎ、25年5月から農家のスタートを切りました。

宅配便の年間契約18人で上々のスタート

“グリーン”では、有機農業を展開する農地

除草、防虫、害獣対策を立て、敢然と戦う

の一部を卒業した研修生が引き継ぐことができます。住田さんはその制度を利用、畑1.3ヘクタールを借りて就農しました。日当たり・水はけともに文句なし、土質もよく、大消費地も近いという願ってもない条件でした。

そこで住田さんは「日本有機農業生産団体中央会」の門を叩き、営農地全部を有機JAS制度に基づく審査を受け、有機栽培圃場としての認証を受けてスタートを切ったのです。

サラリーマンの経験がここで生かされます。抜け目ない準備で住田さんは25年の年賀状で、同年7月から有機野菜の販売をする予告をし、会社の旧同僚や友人達に野菜の定期購入を頼んだのです。有機野菜宅配便として、顔の見える関係を作りたいと願ったのでした。

宅配便は2週に1回、1年に計24回、季節に応じた野菜9品目程度を毎回、段ボール箱で届けるというもの。宅配開始は7月からで、代金は1回当たり3,000円、1年分一括前払い72,000円(3,000円×24)というものでした。

年賀状での購入呼びかけに友人18人が応えてくれました。どんなものが届けられるかわからないのに年間契約までしてくれたのは、住田さんへの信頼感が大きかったからでしょう。130万円ほどのお金が営農のスタート時に入った感動は大きく、勇気百倍の船出となりました。



(多品種栽培の住田さんの農園)

25年5月、入念に作成した計画に沿って、栽培を開始しました。第1回出荷の7月を目指し「露地もの」として小松菜、ホウレンソウ、チンゲン菜、レタス、カブ、ラディッシュ、ニンジン、ダイコンなどの種蒔きをし、ナス、キュウリ、ミニトマト、ピーマン、シシトウなどの苗を植えました。

また秋収穫のサツマイモの苗や、里芋の種芋なども順次植えました。初秋には冬野菜の白菜、大根、聖護院大根などの種蒔きを、また翌春収穫のソラマメの種蒔きなどをしました。ニンニク、タマネギ、ラッキョウなどもこの時期に種蒔きし、幼苗で冬越しさせました。どれも種蒔き・苗植えのタイミングがズレないように暦を見ながら注意深く作付けしていきました。

一足飛びに4年後の今を言えば、栽培作物は計60種に上り、一方で、宅配便の購入者も75人に増えています。

話を戻します。初年度、ハウス1棟(長さ30メートル)を建てました。雨に当たると玉がヒビ割れするトマトをハウス内で、またハクビシンやタヌキなどの害獣から守るためにトウモロコシもハウス内で栽培するためです。ハウスは2棟目を3年目に建て、害獣防止に知恵を絞っています。

有機栽培の大変さは草取りです。仕事の大半が草取りと言っていいほど。特に野菜の株元の雑草はしっかり根本から抜き取ります。農薬が使えないので、「草むしりは決め事。当然の仕事と思ってやっています」と住田さん。

次に害虫対策。条植えしている野菜の列に、特に葉物類には防虫ネットを被せるのが基本で、相当程度クリアできています。青虫を見つけたら勿論、手で潰して回ります。ただし完全とは言えず、「消費者には訳を話し、理解を求め、葉っぱの、少しの虫食いには我慢してもらっています」と話します。

それで、第1作はどうだったか?

25年7月6日に第1便を発送しましたが、人

参、じゃが芋、キャベツ、セロリ、ズッキーニ、きゅうり、いんげんなど旬の野菜がしっかり揃い、購入者は「美味しい」と大喜びしてくれました。「7月6日は、忘れられない日になっています」と言います。

丁寧な肥料設計で、人参の糖度は8.5度も

肥料はどうしているのでしょうか？

勿論すべて有機肥料で、元肥として圃場全体に年1回馬糞を撒きます。馬糞は茨城県美浦町にあるJRAの競走馬のトレーニングセンター由来のものを2トントラックで年3、4回搬入（1回約2万円）してもらいます。馬糞たい肥は窒素分が少なく、腐植なる物質が多い。土づくりに良く、硝酸体窒素が多くなる問題に対応するために、馬糞を選んでいいます。

馬糞のほかは近くの肥料会社から買う「ぼかし肥料」。魚粉、米ヌカ、菜種カス、牡蠣殻、草木灰などから出来ていて、例えばニンジンだと10アールに150kgを撒きます。品目によって量を変えつつ丁寧な「施肥設計」をしています。

これらの有機肥料のもつ各種ミネラル分やアミノ酸類が野菜の豊富な栄養素、そしておいしさの元になることを、住田さんは熱く説明しました。その結果、野菜はどれも美味しく購入者から褒められるそうです。

1つ、糖度で言えば、「例えば住田ニンジンは冬8.5度、春7度あるのに普通モノは平均4度ぐらいと言われていいます」と住田さん。住田ニンジンがはるかに甘く美味しいはずで。

スタートダッシュに成功。次の戦略を練る

28年度の営農成績はどうだったか？ 売上は約880万円。畑の労働力は住田さん1人、奥さんが箱詰めや事務を担当するという態勢で、畑の労働力アップのためそろそろ雇用を考えていますが、ここまでを住田さんは「効率よくやれているし、納得の結果です」と言います。

880万円の内訳は宅配が40%を占めるほか、成田市やその周辺の地域スーパー4店に随時供給

している分が35%。残りは地元の“道の駅”のような店やレストランなどの分です。

成田山近くにあるフランス料理店では店先に住田さんのために「有機野菜無人販売」の棚を設け、食材に野菜も購入してくれていて、「店のイメージアップの相乗効果になっている」と喜んでもらっているそうです。

これらすべての商品に「有機野菜。生産者：住田学」の表示のある有機認証ラベルが貼られているのは言うまでもありません。「私にとっても、スーパーやレストランにとっても、ラベルの威力は絶大です」と住田さんは強調します。

横浜駅わきのデパート「そごう」の地下でも「住田学」の名の野菜を買えるそうです。

ここまで到達した成長の一番の理由は何でしょうか？ 聞くと即座に返事が返ってきました。

「口コミです。宅配契約者たちが次々と友達へ話し、ネットで“住田野菜は美味しい”と情報を流し、つぶやいてくれました。それでファンが増え続けているんです。決め手は品物が情報通りだったということです」

次のステップへ向けては、こう言います。「畑と食卓をもっとダイレクトに結びつける戦略を考えないとイケません。ネット時代の隙間を突く新しいネット手法か、逆にアナログ的な手法か……。畑でいろいろ考えています。そして農業を全身で楽しんでいるんです」

農作業ぶりを見ず、電話で話を聞いたことを恥じていると、「今日は鍋にする約束で、家族が待っています。いまから白菜とネギを抜いて帰ります」——住田さんがそう声を弾ませ電話を切り、2時間の取材が終わりました。

(宮崎隆典記)

- 住田有機野菜の注文は携帯電話かe-mailで。
 - *携帯電話：090-8349-4602
 - *e-mail：gaku.sumida@sf7.so-net.ne.jp
- ホームページもあります。URLは以下です。
 - *<http://sumida-farm.jimdo.com/>